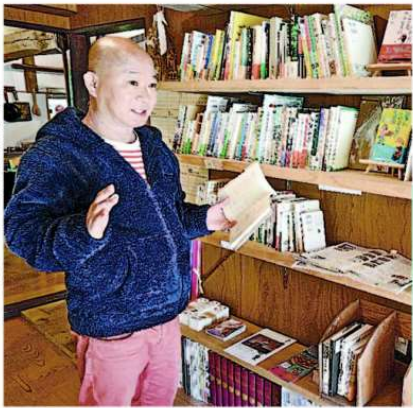




仕事帰りに図書空間2.0に立ち寄った下舞さん(左端)。正田さん(右端)や学生たちと魅力を語り合った



一棚ごとに異なるオーナーの選書が並ぶ図書空間の本棚。宗教本あり、農業にビジネス書ありとユニークだ



「今後は一箱オーナーの参加を増やしたい」と語る中村さん

注目のオーナー制度

本棚1箱分のスペースに自分の本を並べ、誰かに読んでもらう。静岡県の私設図書館が始めた「一箱本棚オーナー制度」が注目され、広島県内でも似た取り組みが広がっている。場所は大学のキャンパス内だったり、ゲストハウスだったり。持ち寄った本を置く「シェア図書館」。本を通じ、人と人がつながる場としても期待が高まる。(赤江裕紀)

広島市中区の観音大1階の談話室。30坪四方のスペースに区分けされた本棚には、それぞれの区画のオーナーの名前や自己紹介などが書かれたカードが貼られている。書店で見ると

なポップが飾られている区画もあり、楽しい。小説や絵本、ビジネス書など、選書にオーナーの趣味や個性が反映されているのも魅力だ。本棚が置かれた一角は「図書



空間2.0」という名のスペース。広島市西区の会社員正田創士さん(40)と同事佐伯区の学校職員長谷川忠広さん(46)の2人の計画が、広島県の課題解決プロジェクト支援事業に採択され、上限100万円の補助を受けて今年10月、同大に開設した。来年1月末までの期間限定だ。

オーナー募集に応じたのは県内外の起業家や農家、心理カウンセラー、小学生たち30人。貸し出しはしていないが、ここでは本を置くのも読むのも無料だ。同市南区の会社員下舞晴太さん(33)は、自販機や道路標識を集めるなど着眼がユニークなリトルプレスを中心に15冊を並べる。会社帰りに寄り、学生に「これ面白い」「どこに売ってたの」などと声を掛けられたこともある。自分の本を手にとってくれている学生との本談議が楽しいという。下舞さんは「僕の本で新しい世界に出合っただって、逆にもうえるとうれしい」と語る。

選書に個性 広島でも交流育む

大学や学生によると以前は談話室は閑散としていたことが多かったが、今では待ち合わせや空き時間に利用する人が増えたという。2年伊藤悠祐さん(20)は安佐南区には「本があるのだから」と立ち寄る。棚ごとに個性が出ていて、タイトルを見るだけでもおもしろい」と喜ぶ。一箱本棚オーナー制度は、多くが本を借りるのは無料だが、本を置くオーナーがお金を支払う仕組み。2020年3月、静岡県焼津市にオープンした「みんなの図書館さんかく」が始めたことで全国に広がりを見せる。現在はネットワーク組織もあり、同様の取り組みをする図書館は、準備中を含めて約50館に拡大した。

みんなの図書館さんかくの土肥潤也館長(分)は「オーナーにとっては本棚が自分を表現する場になり、置いている本に興味を持った人との交流が生まれていく」と話す。呉市音戸町のゲストハウス「瀬戸内タイアログレレッジ」のオーナーの中村功芳さん(46)もネットワークに加入。今年2月、ゲストハウス内にもやっと図書館を開き、自分のお気に入りのビジネス書や旅の本約300冊を並べてスタートした。一箱本棚のオーナー(月2千円)を募集中で、宿泊者向けには「本を4冊持ち込めば1泊無料」の特典を設け、本が集まってきているという。宿泊者以外にも1回500円で何冊でも読むことができ、本の貸し出しもある。ゲストハウスには地域の住民も出入りし、不定期で読書会も開いている。中村さんは「本があれば『どんな本が好きなの』から対話が始まる。県外や海外から来た人と地元の人が交流し、新たな発想を得てもらえる場になれば」と話している。